
青を守るゼロ

Sierra-312

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青を守るゼロ

【Zコード】

Z9985Z

【作者名】

Sierra - 312

【あらすじ】

死の運命を背負つて生まれた獣がいた。

諦めの中にいた獣を一人の少女が励まし、生きようとする切欠を与える。

獣は吼えた。

「生きたい」と……。

その獣の願いを叶える様に獣の前に白き機械仕掛けの獣が現れた。

01・目覚めるゼロ（前書き）

主人公はライガーです。

このライガーは人語を理解し、かなり賢いですが、人語を喋りだす事はありません。

また、人間になつたりする事も在りません。

セシリ亞のペットです。

私は百獣の王と呼ばれるライオンを父に持ち、最も大きな体を持つアムールトラを母として生まれた。
だが、私の身体には不具合が在り、生まれた時より死と隣り合わせの生活を余儀なくされる。

私を助けようと多くの人間が私の元を訪れ、そして去っていった。どうやっても私は助からない。

それが私の運命なのだと、当時の私は幼いながらも悟っていたものだ。

そして、誰も私に見向きもしなくなつた頃、私は一人の少女に出会つた。

今でもアレは、運命的な出会いだつたと感じている。

少女の名は、セシリア・オルコット。

おそらく彼女が私の元を訪れたのは偶然だろう。生まれて数ヶ月でありながら、私は他のライガー達よりも遙かに大きな体を持っていた。

だからこそ、私が死ぬ前に一目見ようと訪れる人間は少なからずいたものだ。

彼女も最初はその一人だったのだろう。

だが、不思議な事に彼女は私の頭を撫でたのだ。

他の興味本位で訪れた人間たちは決して私の頭を撫でる事は無かつた。

死に行く身体の私に触るのを恐れたのか、それとも硝子細工でも扱うかのように慎重になつっていたのだろう。

だからこそ久しく飼育員以外に触れてもらつ事ができて、嬉しかった。

なんだかんだと言つても、私は人工交配によつて生まれた存在な

のだ。

故に、人が私から離れて行く事がどれ程寂しかった事か……。
だからだろう、弱々しくなってしまった身体の全てを振り絞つて

彼女に向かつて頭を下げた。

それは、私の命を削つての敬意の表れだつた。

私から彼女に送る事ができる最大の感謝の表れでもある。

彼女は驚いていたよ。

そして、私にこう言った。

「……わたくしが助けてあげますわ。オルコット家当主の名に賭けて」

彼女の言葉は嬉しかつた。

だが、同時に「いまさらもう遅い」と思つてしまつたのも確かな事だ。

幾ら金が在ろうとも、私が助からない事はすでに分かつていた。
様々な富豪が私を生かす為に金を払い、私がいる国も多くの金を獸医に支払つた。

しかし、それら全ては無為に終わつたのだから……。

彼女、オルコット家も私を生かす為にかなりの額をつき込んだ。
最初の方は彼女自身も私を励ましに来てくれたものだが、時が経つにつれて彼女は私を訪れなくなつてしまつた。

私は彼女が他の人間同様、私に興味を失つてしまつたのではない
かと思つたものだ。

だが、当時の飼育員が言つた言葉。

「セシリアちゃんが来なくなつて寂しいかい？ 彼女はね。イギリスつて国で大事なお仕事をしているんだよ。お前には分からぬだろうけど、EISっていう特殊な乗り物の国家代表候補生としてね。がんばってるんだ。だから、お前も頑張るんだよ」

衝撃的だった。

ISというモノを私は知っている。

私の元を訪れた人間が口にしたのを何度も聞いていたからだ。

人間の世界が女尊男卑という時代に入ってしまった事も知つている。

篠ノ之・束という人物が、ISという鋼鉄製の鎧を作ったと言つ事も何度も聞いた。

だからこそ、私は当時の飼育員の言葉を正しく理解する事が出来た。

彼女が、篠ノ之・束という人物により混沌の坩堝に放り込まれた世界で必死に生きているのだという事を知つたのだ。

その情報は、私の緩やかに死に逝く身体に活力を注ぎ込むには十分だった。

私は……その時、生まれて始めて「生きたい」と願つた。

そして、その願いを込めて月夜に咆哮した。

こういう生まれた故、私は神など信じていなかつた。

だが、私は神見たのだ

白き獣……。

その身を白き鋼鉄で包み込み、金に輝く鋼の爪と牙を持ち、紅く爛々と瞳を輝かせていた。

あの姿を忘れはしない。

いや、忘れたくとも忘れる事は出来ないだろう。

私の身体はあの白き神を見た後、父と母からもらつた体毛は純白に染まり、金の瞳は紅く変わつた。

そして、この身は病弱から程遠くなり、短命という運命からも解放される。

この変化は奇跡と称されたが、この私に対しても異質な興味を持つた存在が現れた。

それは篠ノ之・束という名前だけは知つていた人物。

私は一目見ただけで分かつた。

目の前に現れた女性は狂氣で染まり、世界に飽きている人物だと……だから私はその女性が事前情報から篠ノ之・束だと判断する事が出来た。

だからこそ、その狂氣が言つた言葉は今でも信じる」とは出来ない。

だが、感謝はしている。

「ねえ、あの子と一緒に暮らしたくない？ 変色して色々と変わったライガーなんて珍しいからねー。色々と研究されちゃうよ？ 君、頭良いでしょ？ 色々理解してるよね？ なら、私が手を貸してあげる。一緒に暮らせるようにねー。暇つぶしとしては一度良いしねー」

篠ノ之・束は口から吐いた言葉を守つた。

私が変化してから一日。たった一日で私はオルコット家のペットとして特別に登録される事になる。

篠ノ之・束がイギリス政府に働きかけたのだろう。

一体何を言つたのやら、獸に過ぎない私には理解できない。

まあ、何にせよ。

私はこのオルコット家で主と暮らしむかうという幸せを享受する事が出来ている。

本来ならば死んでいるはずなのだから、これ以上の贅沢など望むべきではないだろう。

「すやすや……すやすや……」

伏せている私の体に寄りかかり、健やかな寝顔を浮かべる主の顔を見られる事を白き神と篠ノ之・束に感謝しよう。

主の重さすらも私にとっては幸福の一部だ。

だが、主は国家代表候補であるが故、いつもしていらっしゃる時間は残り少ないだろう。

高校生に上がった時、きっとHHS学園に入学する為に日本へと旅立つてしまうのだろう。

私に出来る事は、ただ主の帰りを待つて静かにこのオルコット家を守るだけ……。

そんな事を考えていた時期も在った。

なぜだ……。

なぜか目覚めると檻に入れられ、飛行機らしき物に乗せられてい るのだ！？

というか、コレは何処に向かっているう！？

01・目覚めるゼロ（後書き）

ライガーとは？

ライオンを父に持ち、タイガー（トヲ）を母に持つ異種間の雑種・交配種の事。

ライガーは足を伸ばした際の身長は最大で約3.56m、体重は450～600kg程にもなるネコ科最大の動物です。正式な学名がない為、ライガー（ライオンからライ、タイガーからガー）と呼ばれています。

オスのライガーが生殖機能を持ちませんが、メスのライガーは稀に生殖機能を持ち合わせていて場合が在り、子を成す事があります。しかし、残念ながら生まれた子はどちらであっても生殖機能を持ち合わせることがないため、基本的に一代だけの種です。ライガーは神経欠陥、遺伝子の異常、病弱などにより、ほぼすべてが短命という運命を背負っています。

02・困惑する獸

果たして何時間ほど空のうえを旅しているのだろうか？この飛行機が何処に向かっているのか、どういった飛行機なのか、私は知らない。

……。

ふう、世の中には密売というものがある。

密売人からしてみれば、私という健康体の白いライガーは金のなる木というヤツなのだろう。

だが、それならば見張りとなる人間が付いているはずだ。主と見たスパイ物の映画では、密売人は密売する物を必ず見張つているというセオリーがあつた。

無論、現実と空想との違いは分かる。

ここが密売人の所持する飛行機の中ではない事など分かつていて、しかし、私をさらつてなんとするのだろうか？

「ぴんぽん、ぱんぽ～ん」

微妙に間延びした声が機内に響いた。

この飛行機の持ち主だろう。

というか、私はこの声の主を知つていて

「やあ、久しぶり。この天才束さん航空が向かっている先はIIS学園上空でーす。君はゴーレム試作機と一緒に落下して貰うよ？ あの未確認が君に与えた力、見せて欲しいな」

以前会つた時同様、冷たく見下すような声色。

私を物と認識しているのだろう。

否、実験動物と考えているのだろうが、この存在ならば致し方な

い。

しかし、力とは何だ？

「あの未確認、仮にZEROと呼称するけどさー。そのZEROは天才束さんですら見つけるのが遅れたんだよね。アレって何なのかな？」ISじゃないし、機械でもないし、生命体でもないしねー。一瞬だけ確認できた反応はすぐ消えちゃってさ。次に反応が現れたときに行つたら君がいたわけなんだ。だから、あの未確認は間違いなく君と一つになつてている。この天才束さんですら分からぬ存在……。暇つぶしとしてはちょうど良いよね？」

何を言つている？

この狂つた存在を理解できる者はいるのだろうか？

私の一生では、どんなに頑張つても理解する事は出来ないに違いない。

むしろ、理解などしたくない分類に入る人間なのかも知れないな。「君が世界に順応しやすいように調整はしといてあげる。その力はISつて事にしどくからね？ それじゃ、頑張つて束さんの暇つぶしになつてねー」

篠ノ之・束が何を言つているのか良くわからないが、力とやらが私には在るらしい。

しかし、私はその力とやらを理解してはいない。

一体何のことを言つているのやら？

『1時間ほどでエリ学園に到着いたします。乗客の方は落下にお備えください』

物騒な機械音声が響く。

篠ノ之・束の声が聞えなくなつた事と生命の気配が先ほどから一切感じられない事から、どこか遠くから私の状況を見ながら話していたのだろう。

しかし、落下するとはどうこう事なのだろうか？
まあ、なんにしても1時間ほど猶予が在るらしい。
それならば何かしら対策を練る事も出来るだろう。
とりあえずは、この檻から……。

ん？ なんだ、鍵は掛かっていなかつたのか？ とりあえず、周りを見てみるか……。

今まで乗つた事のある飛行機に比べて若干丸みを帯びている様な気がしないでもない。

丸い窓らしきものがあるが、そこから翼を見ることは出来ない。
機内には私が入つっていた檻と鋼鉄製の棺桶の様な物が置いてある
だけで他には何もない。

隣の部屋、恐らくは機長室などが在ると思われる場所へ続く扉も
確認できない事から、密室状態であることが分かるのだが……。

エンジン音もしなければ、飛んでいる音もしない。

振動も私が殆ど感じないのでから、人間ならば全く感じる事は出来ないほどのものだ。

最悪、私が乗つているのは飛行機ではない可能性がある。
よくよく考えてみれば、篠ノ之・束が関わつてゐる時点での乗り物も何か未知の物体である確立が高い。

99.9%くらいで二エンジンの形である事も予測できる。
ま、これ以上の事を私が考えても意味はないだろう。
むしろ、私が一人だと会話もないし、私が喋つたといふで……。

「！」

とまあ、母譲りの鳴き声となる。
ちなみに吠えると……。

「????????!」

父譲りの吠え声となるわけだ。

喋れたりすれば便利なワケだが、種族が違う故にそれは不可能といつモノだろう。

まあ、主は私が喋らざとも私の成したい事を理解してくれる故、人語を喋る必要性はないだろうな。うむ。
さて、残り50分ほどか？ これ以上探索する所もないし、他にやることもない。

よし、寝よう。

。

。

10分後。

『二エンジン航空をご利用頂き有難う御座います。本便は残り10分ほどで空中分解致します。衝撃に備えてお待ちください』

空中分解するのか？ 私は飛べないんだが？ というか、高度はいまどれくらいなんだ？ それと、天才束さん航空じゃなかつたのか？ いや、いまはそんな事はどうでもいい。

窓から見える景色は青い空と白い雲ばかり……。
下を見るることは出来ない。

少なくとも雲の上を飛行しているという事になるわけだ。

一言に雲の上と言つても高度は様々ある。

飛行機はたいてい高度1万m程の所を飛びらしい。
この飛行機モドキの高性能二エンジンならば、2万mくらい軽く超

えていそうだ。

確かに、空の上は寒いと聞いた事がある。

主の侍女であり、私のご飯係りでもあるチエルシー・ブランケット、チエルシー殿が言っていた。

「どうしたの？ 空ばかり眺めて」

「……」

「セシリ亞様と一緒に見ていたテレビで雪が映っていたわね。だから空を眺めているのかしら？」

「……」

「雪はね。空から落ちてきた水が固まつて結晶になつたものなの？ わかる？ でもね。地上暖かいと途中で溶けて雨になつてしまつ。だからね。雲の上がすつごく寒くないと雪にはならないのよ？ でも、雲の上は元々かなり寒いから高いところでは雪が見れるかも知れないわね」

確かにこんな様な内容だったと記憶している。

チエルシー殿は私に話しかける時、まるで幼子に話聞かせるよう喋る癖がある故、言わた事が全部正しいとは限らない。だが、雪が空から降つて来る事は確かだ。

こんな所で空中分解されたら凍つてしまふかもしれない。

『また、本便に搭載されているゴーレム試作型はセシリ亞・オルコットを攻撃対象としています。IISをまとつていない状態であつても攻撃を行う為、『注意ください』

なに？ 主を狙うと言つのか……。

自らを天才と称し、一部の人間以外には興味すら示さない。

私の事も玩具と認識している篠ノ之・束ならばやりかねないだろう。

う。

しかし、ここで外に放り出されれば、たとえ寒さに耐える事が出来たとしても空を飛ぶ事が出来ない私は地面に叩き付けられて死ぬだろうな。

空を飛べない生命体がこの高度から落とされて生き残る方法は……。

あるのか？　いや、ないだろ？

ならばせめてゴーレム試作型とかいう物を壊れれば良いが、あの鋼鉄の棺桶を破壊する事は私では不可能だ。

そして、あの中身であるゴーレム試作型といつものISAなのだろう。

篠ノ之・束が関わっているのならば、ISA以外は思いつかない。

『カウントダウンを開始します。残り300秒』

はあ、せっかちな事だ。

もう少しコツクリと対策を考えさせてもらいたいものだが、こちらの都合には合わせてもらえないのだろう。

私が死ねば、主とチャルシー殿は悲しむだろう。

私が死ねば、目の前にあるゴーレム試作型が何の妨害も受けずにISA学園で学生生活を送っている主を攻撃する為に動き出す事だろう。

空中分解で死なず、外の寒さも耐え切ったとしよう。

だが、着地はどうする？

確かに私は父よりも母よりも優れた個体なのだろうが、この高さから落ちて無事なワケがない。

あの白い神でも無い限り……。

『残り174秒』

ふむ、そういえば私が生まれた施設の飼育員が言っていたな「困

つた時の神頼み」と……。

人工交配により生み出された私に……。自然の子ではない私を想つてくれる神がいるかどうかは知らないが、いるのならば！

『残り105秒』

白き神と同じ身体が欲しい。

私の前に立ち塞がる壁を完膚なきまでに木つ端微塵にする事が出来る力！ 主を守れる身体、如何なる敵をも引き裂ける爪、あらゆる物を噛み碎ける牙、母にも近しい俊敏性、父にも優るとも劣らぬ霸気が欲しい。

私は野生ではない。人工的な獣だ。
だが、欲しい。

主を守るという本能が欲しい。

『残り34秒』

。 。
。 。
。 。

青と白が戦っていた。

白は青よりも強く、青の命令により飛び交う妖精を一閃し両断する。

両断された妖精は、慣性に従つよつて白の横を通り過ぎ、爆散した。

青に勝ち目はないだろう。

青は白を侮っていた。最初から自らよりも弱いと思い込んでいた。

ソレが敗北の理由。

白は自らの牙を研ぎ澄まし、青へと最速で突撃する。

だが、白は未熟だつた。

与えられた力に酔いしれていた。

だから気がつかなかつた。

その牙に相手を噛み砕ける程の力が残されていない事に、気がつかなかつた。

白の牙は青まで届かず、決着を告げる音が鳴り響く。

そして、機械によりアリーナまで届けられた声が告げる。

『試合終了。勝者 セシリ亞・オル』

だが、その声は最後までアリーナに響く事はなかつた。

なぜならば、それを遙かに上回る音と衝撃がアリーナに響き渡つたからだ。

アリーナの地面に大きなクレーターを作り出し、瞬時にアリーナ全てを支配下に置いたソレは、一言で言うのならば鋼鉄の棺桶。ピットへの入り口を封鎖し、出入り口も封鎖する。

そして、観客席と会場とを分けるシールドを最大に設定し、外部の侵入を許さなくした。

自らがぶち破つて出来た上部の裂け目以外は……。

「な、なんだ？ 何が起こつて……」

「一夏さん！ 試合は中止ですわ！ 逃げますわよ」

混乱する白、その手を掴み逃げようとする青。

だが、乱入者の支配下に置かれたアリーナはソレを許さなかつた。ピットへの入り口は固く閉ざされ、外へと出ることとは出来ない。

「そ、そんな……。開きませんわ」

「それくらいなら俺の零落白夜で

「

「無理ですね。先ほどの戦いで一夏さんの白式はそのエネルギーを使いきつてしまっています。展開しているだけで精一杯のはずですわ」

「なら、セシリ亞の」

「……。わたくしももてる限りの力で戦いましたもの。エネルギーなんて残ってるわけありませんわ」

閉じ込められた白と青。

その後ろでは、鋼鉄の棺桶が開き、中身が姿を現した。

上半身は全身装甲型ISと言えなくもない。

首が無く、頭が肩に埋っている様な見た目をし、異常に長い腕を持つている。

下半身は未完成なのだろう。

鋼鉄の棺桶から伸びる無数のチューブに繋がれ、エネルギー供給を受けている事が見て取れた。

作り掛けのIS。

それを無理やり動かしているようなイメージを受けるが、ソレは確かに敵意を青に向けていた。

最初のソレの敵意に気がついたのは白だった。

そして……。

「あぶねえっ！！」

白は青を抱きかかえ、咄嗟に横へと転がる。

直後、先ほどまで青がいた空間を熱線が直撃した。

その出力は、現状の白と青の絶対防衛を貫くには十分な威力。

白と青の背中に冷たい汗が流れ、表情が青ざめて行く。

特に青の変化は著しかった。

青も気がついたのだろう。

田の前のソレが青を狙い、死んでしまっても構わないと思つていい事に……。

観客席からその状況を見ている教師も気が気ではなかつた。突如現れた未確認、そして一瞬で支配権を乗つ取られた第三アリーナ。

放送などがない事から本当にすべての機能が乗っ取られた事を最強の名を関する教師の一人は察していた。

どうする事も出来ないこの状況に胸が押しつぶされそうになりながら……。

「……………い、一夏さん」

卷之三

「わたくしから離れてください。アレの目的はわたくしの様ですしそれにさ、女一人守れなかつたら震えてんのに何言つてんだ！」

白は青を抱きかかえ、残ったエネルギーで逃げ続ける。
当れば白は解除され、生身で敵の前に放り出される事になるだろ
う。

零落白夜はエネルギーが足らずに使用できない。

青は震え、完全に敵の殺意にも近しい敵意に飲まれてしまつて動けない。

だから、白は青を抱きかかえて逃げ続けた。
奇跡を起きた事だけを信じて……。

6

そして、その奇跡は、白が力尽きる寸前に舞い降りた。

鋼鉄の棺桶があけた穴からもう一つ、何かが敵に向かつて落ちてきたのだ。

敵は落ちてきたものを弾き飛ばす。

弾き飛ばされ、土煙をあげながら第三アリーナの壁にぶち当たつた何かは、ゆっくりと立ち上がる。

煙から映し出されるシルエット。それは、3mほどの巨大な獣だった。

「?????????！」

咆哮と共に土煙は晴れ、獣の姿が露になる。

カラーリングは白、鋼鉄製の体をし、鋭く並ぶ金色の牙を見せながら唸り声をあげる。

鋭く紅い瞳は敵を睨みつけ、金色の鋭い爪は敵を引き裂かんと力が込められていた。

見た目は鋼鉄製のライガー。

そして、誰の目にも明らかな事は一つ。

鋼鉄製のライガーが狙っている獲物が棺桶の様なI-Sである事、そして明らかにライガーが怒り狂っている事の一つ。

02・困惑する獣（後書き）

主人公の名前を考えていませんでした。

また、セシリアが一夏に惚れた理由を強くする為にこの様な演出としました。

鈴の時にもゴーレム？は降つて来ます。

これ以外は原作側に沿つた形で書いて行きます。

00/1・タイプゼロ（漫書き）

Fate風味にしてみました。

00/1・タイプゼロ

【CLASS】ライガー

【マスター】セシリ亞・オルコット

【真名】???

【性別】オス

【身長・体重】3.15m（立ち上がるとい6m越え）・530kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力B++ 耐久A 敏捷B+ 魔力E 幸運E

宝具B

【クラス別スキル】

縄張り形成：A

自らの領域として範囲内の全てを把握できる。

20から400平方kmに及ぶ広大な範囲の把握が可能。

ただし、一度は見て回らなければならぬ。

気配遮断：EX

完全に気配を断てば、もはや人間には見つける事は不可能。ただし自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクはBまで低下する。

【保有スキル】

雑種強勢：EX

両親に比べて優れた種となる現象。

これにより両親よりも遥かに巨大な身体となり、力も強くなっているが、生殖能力を失い、病弱となる。

この事から、百獸の王とされるライオンと龍と争う寅を親とするライガーは、筋力・耐久・俊敏のランクを大幅に上昇する事が出来る。反面、幻獣種ではない事と生殖能力なし・病弱である事から魔力・

幸運のランクが大幅に低下する。

忠実：B

人に育てられた為、人間に対しても忠実となる傾向がある。
オスなので女性の場合はランクがAへと上がる。

狂乱：E

野生を持たぬ人工交配種では在るが、両親から受け継いだ野生が稀に目覚める。

マスターの手から離れ、本能が赴くままにマスターの敵を蹂躪する。
一定以上マスターが傷つくと自動発動。
敵の死亡が確認されるまで解除されない。

【宝具】

TYPE ZERO タイプゼロ

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1
戦闘時に強制発動される宝具。

他のサーヴァントが持つ宝具の様に切り札と言えるものではない。
自らの体を機械生命体へと創り換えて戦う特殊な物である。
この状態になる事で如何なる攻撃にも一定の耐久力を有する事になる。

ステータスを筋力A、耐久A+、俊敏B++、魔力B、幸運EXに置き換える。

また、他に3つの姿を有する。

(幸運EXである理由。自らの能力を上回る敵と交戦。だが、相手の実力を上回る程の戦いぶりを披露し、最後には勝利を収めた事から)

TYPE JAGER

タイプ ジャガー

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

高速戦闘形態であり、ボディカラーはネイビーへと変化する。

背中の可変式大型イオンブースターは上下左右と自在に稼動する為、単に直線スピードが上がるわけではない。

ステータスを筋力B、耐久B、俊敏EX++、魔力C、幸運Aに置き換える。

ただし、フィールドが森の場合は幸運Eとなる。

（森林に突入した際、イエーガーユニットを損傷する事故を起こした事から）

TYPE SCHNEIDER

タイプ シュナイダー

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

格闘戦闘形態であり、ボディカラーはオレンジに変化する。

7本のレーザーブレードと5基のエネルギー・シールド・ジェネレーターにより絶大な攻撃力と防御力を有する。

全身に無数のスラスターを装備している為、TYPE JAGER に比べれば遅いがかなりの速度を出す事が可能。

しかし、膨大なエネルギーを消費する為、この形態を維持できる時間は短い。

ステータスを筋力EX+、耐久EX+、俊敏A+、魔力A、幸運Aに置き換える。

また、大技であるセブンブレードアタックを使用すると強制的にTYPE ZEROへと移行される。

（赤いブレードライガーの戦いでセブンブレードアタックを使用した後、シュナイダーユニットを激しく損傷した事から）

TYPE PANZER タイプパンツァー

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1
TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

砲撃戦闘形態であり、ボディカラーはグリーンに変化する。
全身を重装甲で覆い、様々な重火器を装備した事により尋常ならざる攻撃力を有する。

全身にミサイルを満載し、背中には重砲ハイブリッドキャノンを装備している。

全てのTYPEの中で最も遅いが、拠点制圧などを目的とし、圧倒的な火力を持つて敵部隊を強襲する事が可能。

全砲門斉射による必殺バーニングビックバンは、耐久A以下ならば殲滅する威力を誇る。

ステータスを筋力EX++、耐久A、俊敏B、魔力A、幸運EX+ +に置き換える。

また、オーバーヒートしたが奇跡的に再起動し、衛星の残骸を粉碎するという奇跡を起こした事から、この形態で一度敗北しても蘇る。その後、小惑星すら碎くバーニングビックバンを一度だけ使用する事が可能。

だが、使用するとTYPE PANZERの自己回復が終わるまでTYPE PANZER状態になる事は出来ない。

(半壊した状態で在りながら奇跡的に再起動し、落下してくるジャッジ衛星の残骸をバーニングビックバンで粉砕する。しかし、活動限界を迎えるユニットを強制排出した事から)

00/1・タイプゼロ（後書き）

誤字は見つけ次第直して行きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9985z/>

青を守るゼロ

2011年12月31日20時52分発行